

令和6年度第4回 立川市文化振興推進委員会 会議録

開催日時	令和7年1月30日（木曜日） 午後1時～3時
開催場所	たましん RISURU ホール（立川市市民会館） 5階 第6・7会議室
次第	1. 協議 （1） 立川市第5次文化振興計画素案について 2. その他
配布資料	資料1 第5次文化振興計画素案 資料2 素案の案への意見 資料3 素案の案からの変更点
出席者（敬称略）	[委員] 委員長 今井良朗、副委員長 瀧川淳、 宇治康、小林優貴、鈴木美智子、高木誠、成清北斗、堀江けんいち、松寄ゆかり [事務局] 産業文化スポーツ部長 井上隆一、地域文化課長 轟誠悟、市史編さん室長 齋藤安則、地域文化振興財団事務局長 足立香織、地域文化振興財団事務局次長 浅沼宏、地域文化課文化振興係長 稲福秀哉、地域文化課文化振興係主任 郡麻里
公開及び非公開	公開
傍聴者数	0人
会議結果	・立川市第5次文化振興計画素案について協議を行った。
担当	産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係 電話 042 - 506 - 0012

1. 協議

- ・ 委員長の司会により開会
- ・ 事務局より、資料について確認と立川市第5次文化振興計画素案について説明があった。

委員長：立川市第5次文化振興計画素案についてご意見、ご質問等をお願いいたします。

A 委員：印象としては、第5次文化振興計画は第4次文化振興計画から比べてすっきりして、より分かりやすくなってよかったと感じています。第4次文化振興計画を見ると、ほうかごシアターやファール立川の画像が載っていますが、第5次文化振興計画においては現状画像の差し込みはありません。新たな画像を取り入れる予定なのか、もし入れるのであればどのようなのか教えていただきたいです。あと第4次文化振興計画と同じように第5次文化振興計画にも委員のメンバー等が記載された資料編がありますでしょうか。

文化振興係長：第4次文化振興計画と同じような形で、適宜写真を載せる予定です。資料編についても同じように用語解説の部分ですとか、これまでの議論の経過ですとか根拠法令といった部分については、資料編として掲載いたします。

地域文化課長：計画素案2ページの計画の位置づけのイメージ図につきましては、第4次文化振興計画時に記載された内容を最新のものを書き換えて掲載します。

委員長：資料編については基本的に同じようなことを掲載するということですね。Aさんがおっしゃったように、第4次文化振興計画から比べると簡潔でずいぶん整理されたなという印象がありますよね。そういう意味では次に繋がっているという感じがいたします。

産業文化スポーツ部長：先程A委員からお尋ねのあった写真の挿入についてでございますが、ただいま立川市は第5次総合計画を策定中でございます。これは市の方向性を示す計画であり、そこにぶら下がる形で個別の計画ができています。市長より、計画を策定する上で、ビジュアルを前面に出すように、その写真を見るとイメージができるようにしてほしいという要望がございます。イメージ図を入れることによって、どんどん読み進めていけることを期待しております。

委員長：ビジュアルイメージといっても写真やイラストレーションだけでなく、むしろチャートですとか、色んな図式化したものがもう少し本当あった方がわかりやすいことは事実ですね。ただ、冊子形態にすべて載せるのは大変かと思います。ですから、たとえばホームページの中でビジュアルイメージが具体的に出ていると大変わかりやすいと思いますので、ホームページ上でビジュアルイメージを載せることを検討されるという気はいたします。Bさんいかがでしょうか。

B 委員：最近ではインバウンドでナイトタイムエコノミーなども話題になっているが、そういった視点は計画に盛り込めないのか。

地域文化課長：立川市第5次文化振興計画素案の18ページの取組方針に「つながる、ひろがる」というところがございます。こちらの方針の中では、文化芸術に携わる人同士を結びつけるという他にも、美術、演劇など文化芸術の他分野連携のほか、観光・福祉・教育などの文化芸術の連携など、新しい展開につながっていくということが求められると思います。B委員がおっしゃるとおり、文化芸術も観光資源としてとらえているところがございしますので、やはり立川市内で文化芸術が振興していく一方で、今井委員長もおっしゃっているとおり、経済面のところでも一緒に発展していくよう、今後さらに繋げていかなければと思います。

委員長：おそらく情報交換ということも、重要になってくると思います。これまでも出てきたように、東京全体となってくると難しいので、多摩地域全体に関してはもう少し情報共有できるようになれば、確かに今おっしゃっているようなことはうまく繋がっていくんじゃないかと思います。

産業文化スポーツ部長：B委員がナイトタイムエコノミーについておっしゃっていましたが、日本の民族性として、夜になにか文化を愛でるというより、夜はお休みするものである、いう風になってきていると思います。サンサンロードのイルミネーションを綺麗だと思う反面、近隣に住まわれている方にとっては明るい、うるさい、と感じてしまいます。そうするとあまねく行政は耳を貸さない訳にはいきません。みんなで夜をどう楽しんでいくか、綺麗なだけでなく、少し政策的に考えられれば、いい形になるかなと思います。具体的な話しは課長から申し上げたところに内包されていると思います。ご理解ください。

委員長：それではCさんお願いします。

C委員：今までの主な取り組み部分にはアール・ブリュットについて記載されているのですが、これからの具体的な取り組みの中のところにアール・ブリュ

ットという文字が入っていませんでした。酒井市長の中の公約の中にも入っておりますので、アール・ブリュットについての表記をしていただければと思っております。それともう一つ、B 委員がおっしゃっていたナイトタイムエコノミーについてなんですけれども、1 月 31 日から 3 日間ですけれども東京都共催でグリーンスプリングスにて夜、アール・ブリュット作品等を活用したプロジェクションマッピングをされるとのことです。アール・ブリュット作品と音楽を楽しめるということで、ご連絡をいただいておりますので、もしよかったですら見に行ってください。あともう 1 点、昨年とても人気のあった、「ライオンの隠れ家」という発達障害の方を描いたドラマがありました。そのドラマ関係者にお声がけいただいて、アール・ブリュット立川の作品もシネマ 2 で展示しておりますので、もしよろしければ足を運んでいただければと思います。始めたころは誰も知らない状態から 10 年積み重ねてきたことで、立川市の観光協会や東京都など多くの方からもこうやってお声をかけていただけたようになったなと思っております。以前明星大学で行われたイベントにて、アール・ブリュットの世界では有名な林航平さんの作品が展示されており、彼の作品を見た学生さん達がもう一度見たいということで、明星大学がついこの間も地域の方達を呼んで、通所型相談に来ている発達障害の親御さん達とか、福祉事業所の方達も学生さん達も参加していました。アートというのはアール・ブリュットだけじゃなくて、色んなツールになると肌で感じておりますので、是非そのことも織り込んで作られた計画案になればよろしいかなと思います。よろしくお願いいたします。

委員長：確かにアール・ブリュットの文言が意外と少ないのは事実ですね。

地域文化課長：まず、9 ページをご覧くださいと思います。今回ご指摘いただいたところにつきましては、実際には「ふれる、たのしむ」の 1-1-6 にあります「学生・若者・障害者等の文化芸術活動への参加促進」のところに記載することを検討していきたいと思います。ご指摘ありがとうございます。また今後写真・画像を入れる際にもその点わかりやすいもの検討しながら整理していきたいと思います。

委員長：例えば第 3 章の冒頭のところにもう少し文言を入れるというのもいいかもしれません。ご検討いただけたらと思います。続きまして、D さんよろしくお願いいたします。

D 委員：私も変更点を拝見して、とても具体的になったなと思います。計画である訳ですから、伝わるということが大切な一方で、その言葉に限定されすぎるのもよくないです。改めて文言ということが難しく且つ重要であると感じました。今後の希望といたしましては、他市の計画と比較検討

したうえで「立川市ならではの」という部分を、立川市の独自の具体的な取り組み事例以外にももっと文面として盛り込んでみるとどうなのかと考えておりました。あと計画をホームページ等で具体的にわかりやすく説明することが必要になってくるというご意見があったかと思うのですが、計画を市民に伝える上で、内容に応じて専門家からの説明があるとより分かりやすくなるのではと思いました。

委員長：「市民に伝えるための翻訳者」も必要になっていくでしょうね。先程のCさんの話しも含めて、なんらかの形で繋げていくための役割を担って下さる方、分かりやすく伝えて下さる方という役割が必要だと感じました。いかがでしょうか。

地域文化課長：仰るとおり、市民とアーティストと様々な団体をうまく連携をする場をどう構築するのが課題だと感じました。立川市の場合は、立川市の地域文化課の職員だけではなく、文化振興の中心的役割を担う地域文化支援振興財団がございますので、立川市と地域文化支援振興財団がうまく連携を図ることが立川市内の文化芸術にとっては非常に重要になってくると思います。ありがとうございます。

委員長：コーディネーターを検討されるというところで、そのコーディネーターの役割を考えていく上でも、今のご意見は一つの参考になっていくのかなと思います。有名な方を呼ぶというご意見もありますが、当然その方1人じゃなくて、その下にいる方ともうまく連携できるような体制が整えられるのが次の検討課題であると思います。

地域文化課長：地域文化コーディネーターを文化芸術コーディネーターと変えたところも、立川の大きな方向性をディレクションするというようなコーディネートの方でもございますし、また地域となると立川市内の6つのエリアが分かれた中で福祉分野が動いて、そういう草の根的に活動するようなコーディネーターの仕方もあるわけだと思っています。立川市にとっては今後必要なものがどういう形であるべきか、この委員会でも引き続き次年度以降も議論させていただけたらという風に思っております。

委員長：それではEさん。

E委員：立川観光コンベンション協会の立場からですけれども、文化・芸術・観光等のイベントがバラバラにやられていることが多いことを問題視しています。同じ日に隣でイベントを行っているのにもかかわらず何も連携せず、別々のチラシとポスターをそれぞれのSNSで発信していることがよくあります。主催者側は隣で同じ日にやることを知らない、直前

まで知らないでいる状況がしばしばあり、観光コンベンション協会ではなるべく早くイベント主催者同士を繋ぎ合わせて、連携を生み出すよう努めています。そういったもったいないことについて問題意識は持っているけれども、そこを繋げることができる人がおらず、なかなか解決にまですすめられていません。今回の計画の中で1番大事なことは、文化芸術コーディネーターが具体的にどういう人でどういう風にコーディネートをするのか、ということだろうと感じています。文化芸術コーディネーターが観光と繋げたり、様々なこととも連携を図れる人にもなると思うので、そういう人の力が今後大きな柱になっていくのではないかと感じています。あともう一つ広く情報を発信しようとなったときに、立川市1市だけだと弱いという視点があります。東京にある30市町村小さい市町村の地域がそれぞれに発信しているから、中々情報が届かないという話もあり、少しずつ文化の面でも広域連携を進めていけると理想的です。そういった意味で立川に対しての多摩地域の期待は大きいため、各地で行われている文化・芸術等に対し、立川市が入口として旗を振っていくような連携を、時間をかけて進めていくと面白いと感じております。もう一つが文化芸術まちづくり協議会の立場として立川ビルボードで募集した市民ライターの方が次から次に埋もれた情報をどんどん見つけてきて、すごく一生懸命記事を書いて下さっています。そういう方々の活動を通し、個の力を広い範囲で連携していくことも必要性を改めて感じています。

委員長：今日の議題は検討課題の議論についてではなく、素案を改善するために付け加えるところがあるかということです。ただEさんがお話しされたような言葉を今回盛り込むかなんですよね。要は、より積極的なコーディネーターの設置に向けた検討とするのか、従来どおりのコーディネーターの設置の単なる検討なのかということかで大きく違うと思います。ですからこれは、この委員会というよりもむしろこの後、議論されるときに、この検討課題を積極的に考えていくかどうなのかということまで考えていただいてもいいのかなという感じはいたします。

地域文化課長：実は今年度の10月13日の日曜日、よいと祭りが行われた日に、同じくサンサンロードで、ファーレ立川30周年記念事業行われ、またオール・ブリュット立川実行委員会の皆様には10周年企画として展示をしていただき、実はグリーンスプリングスでは妖怪盆踊りが行われ、さらにはステージガーデンでママホリというコンサートも行われていたという状態だったのですが、やはり、おっしゃっていただいているようにチラシが完全に一致しておらず、一体感を出すところまで至らなかったなと感じているところでした。立飛ホールディングスと連携協力を図れるとまた違うものができるのではないかという思いもありましたが、

中々実務的なところで追いつきませんでした。いち早く情報が連携できると、それぞれ可能なところで連携を図ることにより様々な発信力が高まっていくということはE委員のおっしゃるとおり重要かと思います。今回効果的な情報発信をうたっていて通じるところもありますので、より一層考えていきたいと思います。また、西多摩・南多摩はそれぞれ市町村合併が行われたため、ある程度大きなまとまりがあることに對し、北多摩は小さな自治体単位で存在しています。E委員がお話しされていたとおり自治体単位での発信力が、立川市だけでは弱いというところに通じているのかもしれないと思いました。いかにして広域的な連携を行うのかということも、検討していく必要があると改めて感じています。今回の計画の中で中々踏み込んだ記載は難しいかもしれませんが、今のご意見を検討していきたいと思います。また委員会でも色々ご協力いただきながら議論していければと思っております。よろしくお願いいたします。

F 委員：5 章第 1 節の成果指標というのがあるのですが、この目標値はどういった形で決められたのでしょうか。

地域文化課長：文化庁で「文化に関する世論調査」というのが行われまして、その中で 1 年に 1 回でも文化芸術の鑑賞に行ったことがあるか、または鑑賞したことはあるか、参加したことがあるか、若しくはそういうのに自分が活動しているかという指標がございました。調査によると、1 回でも鑑賞・参加・活動したという割合は 54%弱だったかと記憶しています。立川は現時点で 50.3%であり一時的に下がった数値ですけれども、また盛り返してきている状況であること、文化庁の指標を踏まえながら実現が達成可能であるところとして 53%ともってきたところでございます。また文化芸術活動を行う市民団体の共催数ですが、5 年度では 15 事業となっているんですけれども、コロナ前などの共催事業数の平均値なども出して、総合的に判断すると 18 事業くらいになるかなという目算で 18 事業を目標値として設定しております。ただ、日頃から文化芸術に触れる市民の割合というのが一度でも文化芸術に触れたという事実ではなく、日頃から文化・芸術に触れているという市民の意識によって決まる項目になります。そのため、ここは劇的に大きくなる数字ではないのではないかと感じて、このような数値になっております。

委員長：よろしいでしょうか。では G さん。

G 委員：全体的に委員会の意見も取り込んだわかりやすい計画になっていると思います。素案の案に対する意見として、私の方はデジタルの活用が具体

的な取り組みにないのではないかとお伝えさせていただいたのですが、10 ページにわかりやすい説明を入れていただきました。あと具体策としてデジタルアーカイブの取り組みを入れた方がいいのではないかとのご意見を伝えさせていただいたのですが、中々具体策ですと予算の裏付けがないと入れづらいとのお話があり理解いたしました。あと、成果指標を「日頃から文化芸術に触れる市民の割合」と「文化芸術活動を行う市民団体との共催数」の2点に絞り込んだのも、たくさんあるとわかりづらい部分もあるので、よろしいのではないかと思います。今ご説明があったのですけれども、その市民の割合というのは、年1回アンケートをとって把握するというような形を毎回とられているのでしょうか。以前に説明があったかと思うのですが、そこだけ質問をさせていただきたいです。あと委員会等で中間評価するときに、例えば年1回のアンケートの実施ですと中間評価がしづらいかなと正直思ったのですけれども、どうお考えか聞かせていただければと思います。

地域文化課長：アンケートですけれども、市政に関するアンケート調査というものを、立川市全体で無作為に3000件ほど抽出して郵送して、ご回答いただいたものを集計しているような状況になっています。中間的なアンケート調査というのは正直難しいところがあります。かなり手間がかかるものになっていて、大規模に文化芸術分野のみならず、スポーツや産業であったり、環境であったり、様々な分野の設問がある中での一つの項目として回答をいただいているような現状です。また、文化庁の文化に関する世論調査によると、令和4年に文化芸術イベントを鑑賞したことがある人の割合は、大人が52.2%、子どもが63.8%であり、子どもの方が学校などの授業などを通して機会があるからか割合が多かったです。また、鑑賞以外に文化芸術活動をしたことがあると答えた人の割合は、大人13%、子どもは30.4%であり、鑑賞するのではなく、自分自身が活動する割合は、低い数字が出ているという状況です。以上の状況を踏まえた上で目標値を設定しております。

委員長：思っているよりも文化芸術を鑑賞される方、文化芸術活動をしている方の割合は少ないんですね。

地域文化課長：令和4年の調査結果のため、まだコロナが少し抜けてきたあたりの結果なのかもしれないですね。

委員長：よろしいでしょうか。では副委員長。

副委員長：本当に委員の皆様がいわれたとおり、今回の計画は以前のものに比べて非常にわかりやすく、読みやすいが故にCさんがご指摘されたように

今後の取り組み部分からアール・ブリュットの言葉がなくなったということもわかりやすいかなと。意味としては含まれているでしょうけれども、逆にいえばその言葉が消えることによって、ちょっと後退したとも言えるのかなと思いました。例えば、第5次文化振興計画の中のこれまでの取り組みの中にアール・ブリュット立川実行委員会の記載はあるのですが、これからの具体的な取り組みの中から記載が全部消えてしまうというのは、委員会の総意としてアール・ブリュットの活動を軽視するわけでは決してないですので、これからの具体的な取り組みの方にも何らかの形で少し反映をしていただけたらいいかと思いました。あとインバウンドというお話しがB委員からありましたけれども、確かに今、海外から来る人にとっては、非常に安く楽しめる国ということで、どんどん日本にきています。そういう人達に立川市に来てもらう、また多摩地区に来てもらうことを目指さなないといけないところです。いわゆるインバウンドの人達が日本に求めているものは、有名なものや高尚なものではなくて、我々が当たり前と思っているような日本らしさ、一時期ちょっと話題になったローソンの後ろに映える富士山とかですね、我々にとっては普通で車で毎日通るようなところが観光地になったりします。そういう意味ではまち全体が美術館という構想は、海外の人たちにとっては非常に珍しいものなのではないのかと思います。そういった状況下では、中国語、韓国語、英語の3言語ぐらいのパンフレットが立川市だけじゃなく、多摩全体で連携して用意できるといいのかな。もし、文化振興計画に修正を入れる余裕があるのであれば、インバウンド需要がこれからもあると思われますから、「つたえる、とどける」、または「つながる、ひろがる」の計画部分に少しインバウンドというような目線をちょっと入れるというのも一つの案なのかと皆さんの意見を聞いて思った次第です。あとすごく細かいことで申し訳ないのですが、19ページの具体的な取り組みの②のタイトルの文化芸術は「文化・芸術」と中点が入っていて、他のところは結構ないため統一された方がいいかと思います。あと10ページの大きい3の地域文化振興財団との連携強化のところの3行目のここも中点が文化芸術の間に入っていて、意図がない限りは統一したほうがいいかと思います。

地域文化課長：表記のゆれにつきましては今一度事務局で精査させていただければと思います。ありがとうございます。また、確かにインバウンドに関して盛り込むなら「つたえる、とどける」の中で、でしょうか。今後インバウンド向けの情報発信というところの考え方など、効果的な情報発信の記載につきましてもどのような形ですべきか考えないと、と思います。

委員長：ひととおりの意見を伺いましたが、まだ伝えきれていないという方はおっしゃってください。皆さんのご意見を伺って、かなりすっきりしたわかりやすい計画になりました。ただ、確かにここで議論してきたこと

の何か重要なものが簡単に語られてしまっている印象があります。例えば、立川の独自性ってすごく重要だと思っていまして、今財団と協議会の2つがアーツカウンシルの役割を担っています。そのため、この独自性をむしろ生かした方がいいのではないのかと個人的に思っています。ですから、今回の答申案に関してちょっと全体にこの独自性が見えるかなという心配はあります。ですから、まちづくり協議会が強化されるべきでしょうし、それと寄附文化というものを醸成しようという意見もありましたし、そういうものとまちづくり協議会は一体的な関係にある、でそういうものがあって初めて寄附文化も生きてくるのではないかと感じています。市や財団で寄附文化っていうのを全面的に出しても中々難しい問題だと思いますけれど、まちづくり協議会だったらある程度丁寧にやっていけば、可能なんじゃないかと個人的には思っています。次の課題に繋がるような話がいくつかでているのですけれども、うまく文章としては入らないのだろうということが皆さんのご意見を伺ってちょっと感じました。皆さんいかがでしょう。

副委員長：委員長がおっしゃるように、議論したわりに寄附文化の記載がないと思います。また、アーツカウンシルを連携の中の一部としてこれから求めていくことを載せる、若しくは方法論として載せるなど、模索していく課題として記載することは賛成です。

地域文化課長：ご指摘いただいた部分は、14 ページにございます取組方針の「はぐくむ、ささえる」というところになります。以前にいただいた今井委員長のご意見を反映して、14 ページの上から3段落目にございます地域文化振興財団と文化芸術まちづくり協議会はアーツカウンシルとしての基本的な役割を果たしますという記載をさせていただいております。これは立川市にとっての独自の仕組みです。一般的なものとは異なり、立川市の場合、以前の成り立ちの中で、文化芸術まちづくり協議会がそのアーツカウンシル的な役割を担うような形で、お金の支援に関する相談をするとか、人材育成をするというところで携わってきました。寄附文化についても15 ページの一文になってしまって大変恐縮ですが、具体的な取り組みの②にございます、アーティスト文化芸術団体等の支援の項目2つ目に、文化芸術活動の経済的側面の支援のあり方、寄附制度や基金についてまちづくり協議会とともに検討する旨記載しております。おっしゃるように、まちづくり協議会自体が行政だけではなく、市内の芸術団体であったり、企業が関わっていたりして、成り立っているような協議会になってございますので、その中で検討する、色々なご意見をいただきながら立川にとってよい形を模索できればというか、そういった独自の組織体制が立川市にはございますので、よい形をとって取り組んでいきたいと思っています。

委員長：今まで聞きそびれてきているのですが、財団からの支援金が独立して協議会から補助金ができるようになりましたが、どういう経緯でそうなったのでしょうか。

地域文化振興財団事務局長：経緯は定かではないのですが、財団として文化団体への助成する上で、ある一定の要件がついているものでないと助成できないため、もっと広く助成しようと組織を立ち上げました。広く寄附を募りながらアーツカウンシルならアーツカウンシルのところで実施しましょうとひとつ協議会ができて、その後、協議会が財団でやれていなかった部分をきちんとやっていきましょうというようになっていったと聞いております。

委員長：珍しいのではないのでしょうか。どうですかね。

地域文化振興財団事務局長：そうですね、やはり財団が公的資金・寄附を受けやすい団体ですので、そこで寄附をもらって分配するっていうのが普通かなと思いますが、私がちょうどいなかったときでもあります。立ち上がったときになぜこの団体が立ち上がったのか、ちょっと不思議に思ったところがあるのですけれども。

委員長：どなたもご存じないのですか。

産業文化スポーツ部長：そうですね、財団が公益財団法人の認可を受けて、寄附が受けられるような環境になったので、そこをひとつキーにして協議会というところをサポートしつつ、協議会が独自性を担保しながら進んでいこうという一種の意思表示もあったのかと思います。

B 委員：いいですか。

委員長：どうぞ。

B 委員：実はね、〇〇さんが部長のときにまちづくり協議会を設立しました。当時、財団職員の負担がものすごく大きかったため補助金業務を独立させてやればどうかということで財団から切り離して、市民の公募を行って始めました。

委員長：あの〇〇さんがそういう音頭をとられたことは初めて知りました。僕は〇〇さんを見ていて本当に素晴らしいセンスだと思っています。他と違い、財団とまちづくり協議会の二つに分かれているから活動の可能性がいくらでも広がっていきます。ただしここでも話題になりましたけど、

企業の寄附金があまりに少なすぎる。ですからやはりもう1回財団が財源としても豊かに持てるような環境を作っていくという。それを行政はもちろんですからね、支援とか強化という形でできることはあるはずです。立川市の財団は独自性があり、全然違う形をしていて、すごくいいと思っています。協議会がそういうアーティスト支援等をやっているような体制をもっているわけです。ただ、もっと広げていくためには財源がない。その財源は今までみたいに市に頼っているのは仕様がなない。だから寄附的な部分を育てていって、もう少し補助事業の活動を充実していけば、他の市や区がもっているようなアーツカウンシルをわざわざ作る必要性はないと思っています。すでに同じことをやっているじゃないですか。だったら持っているものをさらに充実させていく方が絶対いいと思います。ですから、これこそ立川の独自性で、こういうアーツカウンシル形態、全部なんでもかんでも海外を真似すればいいってわけじゃありません。むしろ日本に向いている方法があればもっと伸ばしていっていいと思います。それが今回やや後退してしまったことが残念でした。

E 委員：コロナ前は協賛金という方法をとって色々集める努力はしていましたが、コロナのときに1回それをやめてしまいました。やめてしまったというのはちょっと大きかったのかもしれませんが。あとは結構、企業まわり等を行っていましたが、集める額は本当に少なくて微々たるものでしたが、それでもすごく恐縮してしまう空気でした。今おっしゃられたように、もう少し大きく企業からお金を集めることは、もう少し丁寧にやらないと中々難しいかなと思います。

委員長：私も一度だけ企業回りに参加させていただいたこともありますけれども、最終的な予算額の低さを見てびっくりしました。それが未だに続いているということが、もう少し問題視してもいいのかなと思いました。今Bさんから話を伺って、納得する部分もありましたが、これもやっぱり独自のものですから育てていった方がいいような気がします。他にご意見ございますか。ございませんようでしたら、今日出た意見がどういう形で今の素案に反映できるかどうかは難しいと思いますが、可能な限りお願いしたいと思います。私自身も今回素案を読みまして、一番大きな特徴というのは、国や都の方向性を考慮しつつも、立川の独自性というものが前面に出ているということがはっきりしているところだと思います。それと、これまで私も長い間文化推進委員をやっていましたけれども、主役は市民だということがずっとこの委員会の中でも言われてきたことですが、これが今回の第5次文化振興計画でさらに言葉としても出てきました。これはとても望ましいことと思います。これまでの全体の目標的なものであったものが、皆さんが主役で、皆さんが作り、

一緒に作っていくという方向性が第5次文化振興計画で明確になったように感じます。そのため、第5次文化振興計画がうまく次に繋がっていくことを願っております。以上でございます。そうするとこれは答申という形で今日お出しする形になるのでしょうか。

地域文化課長：そうですね。

委員長が市長あてに答申を渡す。

産業文化スポーツ部長：お渡しいただきましてありがとうございます。今日このように答申を受け取りまして、これをまた私どもの最大限にできる限り計画に反映して参りたいと思います。今日は皆様のご意見を伺っていると、文化芸術というところが一つ文言だけで終わらないで、具現をどうすればいいかというところのヒントになりますし、アーツカウンスルというのは、やはりその財団の中で一つ作らなければいけないのか、という思いがありました。今井委員長の方から協議会と財団がそれぞれ独自性をもっていることが立川市の独自性というご意見を頂戴しまして、なるほどというようなこともございました。そういうことも含めまして、答申の方に書かれているという認識で今後進めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

委員長：では、その他について事務局からお願いいたします。

文化振興係長：今回いただきましたご意見の方を改めて持ち帰って検討させていただきます。後日、素案に反映したいと考えております。またこの素案につきましては、今後理事者、及び教育委員会との調整を経たあとで決定いたしまして、3月議会にご報告いたしたいと思っております。その後、4月に入りましてパブリックコメントを行いまして、そこでいただいた意見などを反映した上で、5月頃に計画として正式に決定をして6月議会で報告をするという流れをとります。パブリックコメントなどでいただいた意見などは、委員の皆様には後日共有させていただければと思います。また、その他といたしまして、これまで4回にわたりまして精力的にご協議いただきましてありがとうございました。次回は第5次文化振興計画策定後に開催させていただく見込みです。会議の日程については改めて調整させていただきます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

委員長：どうもありがとうございました。第4次に引き続き第5次の計画ですけれども、4回の委員会を様々な意見が出て、大変有意義な委員会だったと思っております。問題はこれがどのような形で繋がっていくか、

発展していくかという意味では、1次から4次までずっと私も関わってきたことを踏まえて、おそらくこのままどんどんどんどん、少しずつ上がっていき、最終的にはあるひとつの立川らしさというものがより明確になっていくのかなと思っています。どうもありがとうございます。

副委員長：もう委員長に言いたいことは全部言われてしまったのですが、今年度は本当に通常よりも多い活発な議論を通して、第5次文化振興計画の答申を渡すことができたことをうれしく思っております。私自身は今回で文化推進委員として3年目になるのですけれども、実際答申をして新しいものを作るというところに携わりまして、当事者意識がより一層芽生えてまいりました。次年度以降、皆様に今度はこの計画の実行というところでですね、活発に議論をしていただけたらと思っております。また、計画をまとめていただいた地域文化課の皆様にも、非常にお礼を申し上げたいなと思います。本当に皆さまお疲れ様でございました。

委員長：幸い私も、大学の卒業生がアーツカウンシルだとか、文化財団だとか、色んなところに就職しているのが結構いるものですから、そういう意味では様々な意見を聞いたりして、立川が本当に独自に、なおかつ積極的にこういう活動をしていることをとても肌で感じます。そういうこともあって、私も長い間委員会をさせていただくという形をとってきました。是非、これから次に繋がるっていくことを期待しております。どうもありがとうございました。